

学生の(ベスト)コメント

1. 経済学生は、なぜ、勉強しないとの批判に平気でいられるのか？

(64)冒頭に日本の経済学部は勉強しないとおっしゃっていました。また、日本の大学生は海外に比べとりわけ勉強しないとよく見聞きます。原因は何だと先生はお考えでしょうか？

もちろん学生の怠慢さが原因だとは思いますが、それならば他学部の学生の気質が勤勉で経済学部の気質が怠慢ということになってしまいます。

(72)今回の授業では、『経済学部生は勉強しないものになっている。それは、大学の授業が現代の実情とかけ離れていて意味を感じられないからである』とおっしゃっていましたが、具体的に私たち大学生はこの授業を通してどのような意味が得られるのか具体的に教えて頂きたいです。

2. 「日本国」と「日本の企業」ベクトルは、いつも同じ方向を向いているのか？

(3)日本の企業が韓国に勝てないのは、政府の支援が足りないからだと思う。

(45)講義では韓国やアメリカなど諸外国がうまく海外の諸国を利用した戦略で利益をあげ、業績をあげているというように捉えられた。一方、日本もユニクロなど、海外で生産を行う等の諸外国を巻き込んだ戦略を行っている企業は多数見られる。ところがそれは、産業の空洞化に繋がる、と懸念される面がある。日本人は海外へ拠点を移すことを嫌がる傾向があるのか。どう違うのか？ そこで、海外が進める政策と、日本が進める政策とを対比し、どう違うのかを再認識するといったことを行うと面白いかなと感じた。

(64)国と企業のベクトルが一致しない場合があるとおっしゃいました。なぜこのようなミスマッチが起きてしまう政策決定をするのでしょうか？ なぜ政府は国民目線・企業目線の政策を展開できないのでしょうか？

3. アップルの部品メーカーとの契約について

(5)Apple は、部品メーカーを競争させて決めるということでしたが、それを受けたメーカーがコスト削減をした果てに不良品が増える可能性はないのでしょうか。そうなれば、一つの企業に決めて徹底した製造を行った方が良くと思うのですが、その点についてはどう思われますか。

(13)今回のお話でアップルの経営方式のなかで、部品企業等の使い捨てのような話をされていましたが、それによる外部不経済をどのように扱っているのでしょうか？

講師からのコメント

1. 秋学期「企業分析」の第 1 回であったので、学生諸君のこの講義に対する積極的な取り組みを総括的に求めました。そのなかで、「経済学部生は勉強しない」ということに関心が集まりました。これに触れたのは、40 年以上前になる自身の体験「猫文Ⅱ」からの反省を込めて、「前車の轍を踏んではならない」というアドバイスのつもりです。(64)について、勉強しない理由は明らか。①簡単に卒業できるから。②就活にあたり、文系の場合、企業は学業成績を問わないから。③講義、読書、友人との会話などから、自分が「取り組んでみよう」と思う「テーマ」を見つけていないから。(72)について、学生諸君の大半は、研究者への途を歩むのではなく、卒業すると(研究者以外の)社会人になるつもりでしょう。そのような学生にとって、経済理論を勉強することは、そのロジックをツールとして、複雑に絡み合う現実の経済・社会を少しでも解きほぐす能力を身に付けることではないでしょうか。この講義では、「理論」を使えるかを試してもらうために、現実の経済・社会の膨大なデータを提供します。各自、「理論の包丁」をふるってみてください。たとえば、ICT と結びついた「ビットコイン」という新しい決済(・投機)手段をどのように理解したらよいか。レガシーともいえる銀行を通じた現行の決済方法に比べると、圧倒的なコスト安が評価されていますが、一方でネットという「外部経済」の利用は、最終的には誰かが負担していることになる。本当にコスト安なのだろうか？ これなどは、正しく「経済学の出番」であると思います。

2. とても興味深い設問です。アприオリに、「日本国」と「日本の企業」ベクトルは一致していると考えてはいけません。そもそも、日本という国家がめざす目標は何なのか？ それに対して、日本の法制により設立された日本企業(営利法人)のめざす目標は何なのか？ 青臭い議論ではなく、具

体的に、たとえば、雇傭からの視点、あるいは租税(納税)からの視点で考えてみてください。
日本政府は日本企業に何を求めることができるのか、逆に、日本企業は日本政府に何を求めることができるのか？ そのなかで、家計(勤労者、消費者、投資家)である皆さんは、何を求めますか？

3. 経済学の範疇を超えた「総合学習」に相応しい課題ですね。簡単に言ってしまうと、アップルの持つ圧倒的な buying-power を使った「買い手に有利かつ詳細な契約」になっているはずです。日本のアセンブリ・メーカーが協力会社との間で結ぶ、「取引基本契約」「製作物供給契約」「製造委託契約」(日本での標準的なものは、法律解説書やネット上にあります。)などとは、似ても似つかない「契約の束」です。その内容は、守秘義務に護られて外部からは見ることはできません。もう一つ、アップルは部品企業を選定するに当たり、相手先企業の隅から隅まで調べ上げています。アップルはファブレスですが、複数のメーカーを見ていることから、メーカー以上に価格・品質・納期を厳しくチェックしていると言います。アップルと契約するときには、契約期間中に起こりうるべきことをすべて想定しておかないと、思わぬ「毒りんご」を食べさせられることとなります。それは、アップルが(一方的に)作成した契約書をどこまで読み込むか、という法務の問題でもあります。後藤直義・森川潤「アップル帝国の正体」文藝春秋 2013 年を見てください。その実態が垣間見えると思います。

以上